

魔法使いの愛弟子は、師匠の苗床として万匹の子を孕む（体験版）

……二〇年前、私の祖国は滅亡の危機に瀕していた。強大な軍事力を誇るラピディア帝国が、その侵略の矛先を、私の祖国であるオルティマ王国へと向けてきたからだ。

ラピディア帝国は非道な国家である。併合されれば王族や貴族は皆殺しにされ、国民は奴隷のような三等民・四等民扱いされる。制度や仕組み、扱いに反発すれば即死刑だ。戦わずして降伏してもその扱いに差異は無いゆえ、平和の道は初めからなく、かくして私の祖国オルティマ王国は、強大なラピディア帝国と戦う道を選んだ。しかしそれは、辛酸を舐めるような苦難の道であった。

オルティマ王国は決して大きな国ではない。小国ではないにせよ、大国とはとても呼べない中間に位置する国力で、超大国とも称されるラピディア帝国と比較すれば、その国力の差は天と地ほどの隔たりがあった。

そのような国がラピディアと戦うのだから、戦いの様相は最初から総力戦の運びとなる。オルティマはラピディアと戦うため、職業軍人だけでなく、子どもや老人、さらには後方支援要員として女性までも動員し、国家総動員で帝国との闘いに臨んだ。当然、私を含めた魔術師も戦場へと送られた。それも最前線の激戦地へと。

ラピディアの侵攻は熾烈を極めた。歩兵の大軍、騎兵の大部隊、戦奴と言われる武装奴隷の軍団、さらには魔術の力で改造した生物兵器群など、ありとあらゆる軍事力を動員してオルティマに襲いかかってきた。彼らにとって反逆は大罪であり、自分たちに歯向かうのであれば、大国であれ小国であれ蹂躪する気概であったのだ。帝国の猛攻に、多くのオルティマ兵が倒れ、血泥の海に沈んでいった。何千人、何万人も死んだ。私も仲間たちを永遠に失いながら、それでも必死になって戦った。杖をふるいながら、攻撃魔法を放ち続け、何百人、何千人という敵兵を葬って、その倍以上の敵兵を傷つけた。味方で、これほどの戦果を挙げた者は他にいないであろう。

むろん、この強さには理由がある。私は戦場でより強く、より長く戦うため、魔術の力を使って、自分の身体に様々な動物や植物、魔物、さらには人道の魔導生物の因子を組み込んだのだ。これは邪法といわれる禁忌の術で、その副作用として、私の身体はふた目と見れないほど醜悪な様相へと変貌していったが、それでも私は

構わなかった。祖国の勝利に貢献するために、帝国に勝つために、私は文字通り我が身を犠牲にしながら、ラピディア軍と戦い続けた。

敵から、あるいは味方から、「化け物」と呼ばれ、声を潜めて囁かれても、私は歯を食いしばって戦い続けた。全ては祖国のためだった。

その介あつてか、我が祖国とラピディアの間に、ついに和平が結ばれることとなった。オルティマは、ついに帝国の侵略を退けたのだった。これは快挙だった。

ラピディアとの和平が結ばれる直前、私は国王に呼び出しを受け、王都に召還された。国王は私の姿を見て、酷く驚き、視線を反らしてから二度と目を合わせてはくれなかったが、私のこれまでの活躍を労い、これから国のために尽くしてくれるかと尋ねてきた。私は迷わず「はい」と答えた。

そして、我が祖国とラピディアの間に休戦協定が結ばれた。

私を「手土産」として……。

ラピディアが休戦のために出した条件——それは、私の身柄の引き渡しだった。私は戦場で活躍した。いや、活躍し過ぎてしまった。多くのラピディア兵を傷つけ、殺し、ラピディアが誇る生物兵器を何十体も殺戮した。ゆえに、ラピディアは、オルティマという国よりも私を憎むようになっていたのだ。それだけではない。後

で知った話だが、私は味方からも恐れられ、気持ち悪がられていたとのことだった。つまり、帝国に対する身柄に引き渡しは、オルティマにとっても恰好の厄介払いだったというわけだ。これほど滑稽な話があるだろうか。

騙され、「魔封じ」の拘束を受けた上で帝国へと送られた私を待っていたのは、文字通りの「地獄」であった。

帝国市民たちから「化け物」と罵られて石を投げられ、私を憎むラピディア兵からは容赦なく矢を浴びせられた。私はこのまま殺されると考えていたが、運命はそれよりもっと残酷であった。

広場で身柄を晒され、市民や軍人たちの復讐心がある程度満ちた後、私の身柄は帝都郊外にある研究施設へと移送された。そしてそこで、魔導実験の材料として、醜い身体を、さらにぐちゃぐちゃにされたのだった。

身体を切り刻まれ、器具を突き刺され、体液を採取され、得体の知れない薬品を注入され、臓器を抉られて、私は死ぬこともできず、苦しみ、のたうちまわった。そんな私を見て、ラピディアの魔術師たちは笑うのだった。

私が「破棄」という名の解放を受けたのは、ラピディアに身柄を引き渡されてから二年後のことであった。これ以上調べるものがなくなり、何の反応も示さなくなった私を、ラピディアの魔術師たちは「用済み」と判断したのだった。トドメを刺

して確実に息の根を止めなかったのは、慈悲からではなく、私をさらに苦しめるためであった。

かくして私は他の「ゴミ」と一緒に地下の廃棄場へと捨てられたわけだが、しかし私は死ななかった。死にたくなかったからだ。

自由になった私の心に芽生えた感情は望郷の念であった。祖国に帰りたい。そして故郷の地で死にたい。その一心で、私は捨てられた実験生物の腐った肉を食み、得体の知れない薬品が混じった汚水を啜りながら、少しづつ力を蓄え、生き延びた。その過程で私の身体はさらに醜く変貌していったが、私にはもはやどうでもよかった。

私はただただ、生まれた国に帰りたかったのだ。

そしてある程度体力が回復したところで、私は魔術を使って廃棄場を抜け出し、そして夜の闇に紛れて帝国を脱出した。

魔術で姿を変え、隠密の帰国を果たした時、祖国は祝福に包まれていた。それはラピディア戦勝二周年を祝う記念行事であり、国王夫妻に娘が生まれたことを喜ぶ祝賀行事を兼ねた祝いの宴だった。王都には喜びの声が満ち溢れ、人々は踊り、飲み、歌いながら、笑っていた。そう、笑っていたのだ。楽しそうに、愉しそうに……！

その瞬間、私の心に怒りの感情が芽生えた。

「憎い……」

私は初めて憎悪した。

「憎い、憎い、憎い……」

私は国のために死力を尽くした。魔術で身体を「化け物」に造り変え、傷つき、苦しみながら、何千人という敵兵を葬り、その数倍を傷つけ、負傷させ、さらにはラピディアの恐ろしい生物兵器たちを何十体も倒してきた。英雄と呼ばれることはなくてもそれに相応しい働きはしたはずだ。にも関わらず、祖国から与えられた仕打ちは敵国への送還であり、そこで自分を待っていたのは文字通りの「地獄」だった。

私は苦しんだ。苦しんで苦しんで苦しみ抜いた。

なのになぜ、こいつらは、笑っていられるのか！

「憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い……ッ！」

国が憎い。国民が憎い。自分をこんな目に合わせた国王が憎い。何もかもが憎い！私は決意した。この国に復讐することを。可能な限り、邪悪でおぞましい方法でもって、この国を亡ぼすことを！

「ふふ……ふふふ、ふはははははははははッ！」

私は笑った。

阿鼻叫喚の地獄に落ちるこの国の未来の姿を想像して、私は笑った。それが邪悪な笑い方であることを心の底から望みながら。

……その夜、見たことも無いような「化け物」が王宮を襲撃した。大勢の衛兵が殺され、貴族や重臣たちが殺害され、そして王妃までもが惨殺体となって発見された。犠牲者の数は九〇〇名を超えた。その中には、国王夫妻の生まれたばかりの娘も含まれていた。どんなに探しても、死体が発見されなかったことから、国王の娘は「化け物」に丸呑みにされたと推測された。

妻を失い、生まれたばかりの我が子を失った国王は、国軍に命じて、王宮を襲撃した「化け物」を殺すよう命令したが、王宮を襲撃した「化け物」を見つけることはついにできなかった。

国王は、葬儀の場にて、名前も無いまま殺された我が子のために名前を送った。ルティアという名前を。それは古代ルエスト語で「幸せ」を意味する言葉であった……。

*

……王宮から生まれたばかりの赤ん坊を連れ出して十数年が経過した。私は王都から遠く離れた辺境に棲みつき、そこでさらってきた娘を育てた。と言っても、ただ育てたわけではない。私の復讐計画の道具となるよう、改造と洗脳の手心を加えながら、丹念に、丁寧に、繊細に、大切に育て上げた。皮肉を込めて「ルティア」という名前を付けて。

大切に育てた介があったのか、ルティアは充分、否、それ以上に美しい娘に育ってくれた。容姿は端麗で、瞳は宝石のようであり、鼻はツンと高く、唇は花卉のようであり、華奢な手足はまるで象牙細工のようにしなやかだ。身体には無駄な肉が一切付着しておらず、その反面、女性を象徴する部位である胸や尻は肉付きがよく、発育がよい。世の男どもがルティアの姿を見たならば、一〇人中一〇人が生唾を飲み込み、股間を固くするに違いない。

容姿の美しさはルティアの元々の素質によるものだが、女性象徴部位の発育の良さはルティアが赤ん坊の頃から施してきた肉体改造の成果である。雌としての能力を極限レベルで発揮させるため、私は魔法を使ってルティアの体組織を強化し、改

良し、調合した魔法薬を母乳の代わりに与えてその機能を高めた。この改造には一〇年を超える長い時間と針の穴に矢を通すような繊細な技術を必要としたが、ルティアの成長は、充分、否、それ以上に満足のいく成果となった。

（機は熟した……）

私は外で魔法の練習に励むルティアを眺めながら邪悪にほくそ笑んだ。

改造を施された以外、ルティアは普通の少女と何ら変わらない。彼女は風邪も引いたことがないような元気の塊（病気に対する抵抗力を極限まで高めた結果だが）で、明るく、天真爛漫で、心も優しい。私の醜い姿を見ても物怖じなどせず、笑顔で接することができるほど。まあ、そうなるよう育てたからだが。

私はルティアに人間としての生活力だけでなく、強い魔力を体内で養わせるため、ひと通りの魔法の知識と技術を授けた。これは洗脳教育の一環でもあり、ルティアに「師匠と弟子」という上下関係を植え付けるためだ。ルティアにとって私は唯一絶対の「神」であり、彼女はもはや私には絶対に逆らわない。喉を掻き切れと命じれば、笑顔でそれを実行に移すだろう。

（あとは計画を実行に移すだけだな）

私は心の中で呟いた。

いよいよ、復讐をする時がきたのだ。

「ルティア！」

私は弟子の名前を呼んだ。

「！」

魔法の練習をしていたルティアがこっちを向いた。その顔にはバアツとひまわりの花のような笑みが浮かんでいる。

「はい、なんでしょうかお師匠さま！」

そう言っ、ルティアは小動物を彷彿とさせるような軽やかさでこっちに向かって駆けてきた。大きな乳房が、ぶるんぶるんと大きく揺れた。

ルティアは私の前までやってくると姿勢を正し、次の指示を待つように顔を見上げた。私とルティアの身長差は大人と子ども以上の開きがある。そして体格差は、それ以上であった。

私は、そんな彼女の顔を覗き込んだ。顔から生えている繊毛から、ナメクジが分泌するような粘液物質が滴り落ちてルティアの頬に付着したが、彼女が表情を崩すことはなかった。

「ルティアよ、よく聞きなさい。いよいよ「計画」を実行に移す時がやってきた」その言葉を聞いた瞬間、ルティアの頬が、まるで色づいた紅葉の葉のように紅く上気した。それと同時に、花卉のような唇から、甘い吐息のような言葉が、色を伴

って流れでした。

「ああ、いよいよ……いよいよですね。いよいよ、お師匠さまのお役に立てる日がやって来たのですね……」

そう言ってルティアは、自分の顔よりも大きな乳房を、布地の上からその華奢な手でギュッと掴むと、無意識のうちに力を込めて揉みはじめた。呼吸も荒くなり、身をもじる。私が口にした言葉が何を意味するか、ルティアは承知しているのだ。私は洗脳の一環として、ルティアが幼少の頃から、これから彼女に待ち受けている運命を話し、それを受け入れることこそが彼女にとって「幸せ」なのだということを刷り込むように教えてきた。何千回も、何万回も、何億回も。繰り返し、繰り返し。言葉として説明することもあれば、幻術を使って脳裏に映像として流し込むこともした。その「時」が来た時、速やかに自分の運命を受け入れるように。

その最後の仕上げとして、私はルティアにもう一度、問いかけた。

「ルティアよ」

「はい、お師匠さま」

相変わず胸を揉みしだきながら、ルティアが答えた。

「いま一度、汝に問う。お主の役目はなんだ」

ルティアは顔を上気させたまま即答した。

「わたしの役目は、お師匠さまの復讐のため、その先兵となる「子」を孕んで孕んで孕みまくって産むことです！ 子袋がズタズタになり、使い潰して壊れるまで、卵子の全てを使ってお師匠さまの「子」を産み続け、お師匠さまの復讐を果たすための肉袋となることです！」

ルティアはほとんどひと息に、まるで宣誓とも取れる淫猥な言葉の羅列を、その花卉のような口から濁流の勢いで言い切った。

「ふふふ……」

私はそれを聞いて満足そうに笑った。

そう、それこそが——いまルティアが言ったことこそが——私の復讐計画なのだ。ルティアにおどましき化け物の「子」を産ませ、それを野に放ち、襲わせる。国を、人を、生きとし生ける全てのモノを。

そのために、私は長い時間をかけてルティアを育成してきたのだ。恨みある男の娘を、肉袋として、苗床として使い潰してやるために！

私は、ルティアに命じた。

「ルティア、身に着けている物を脱ぎなさい。それはもう、お前には必要ないものだ。脱ぎ棄てて、裸になるんだ」

「はい、わかりました！」

普通なら、戸惑い、躊躇うような命令にも、ルティアは喜々とした様子で、素直に従う。

羽織っていたマントを外し、恥部を覆っていた下着のような布地を捨てる。すると、女神の裸体を彷彿とさせるような肉体が露になった。私はその身体を見て、思わず呟いた。

「素晴らしい……」

それは感嘆の言葉だった。そして、自分に対する誉めの言葉でもあった。

見事な改造の成果という他ない。人の頭よりも大きな乳房は柔らかく熟れ実っており、興奮のためか、乳首はツンと高く尖っていて、いまにも母乳が滴り落ちてきそうな様相を見せている。腹部には無駄な脂肪分が一切付着しておらず、その分、尻にはたつぷりと脂が乗った肉が付いている。アソコはまだ一本も毛が生えていない。いつるつるの状態で、秘部は貝のようにぴたりと閉じたままだ。しかし、ソコからはすでに密が湿り出し、糸を引いて地面に滴り落ちようとしていた。

「はあ、はあ、はあ……」

裸になったことでより興奮したのか、ルティアは顔を赤らめたまま、まるで走った後のように肩を上下させて息をしている。その表情は、物欲しそうに愛おしく歪んでいた。

「ふふふ、興奮しているのかルティア」

「は、はいっ！ こ、これから、お師匠さまにめっちゃくちゃにしたいだけなと思ったら、なんだか……なんだか、とつても、言葉では言い表せないような、その……エッチな気分になってきちゃって……」

「ふふふ、そうか。それは私も同様だ」

そう言つて、私は体内に収納していた生殖器の一本をさらけ出した。

ずるるるるるるるる……。

私の言つた言葉に嘘はない。事実、私も興奮していたからだ。ついに復讐の時がきた。念願が叶う時がやってきたのだ。これが興奮せずにいられるか。これほど興奮したことは久しぶりだ。その証拠に、外へとさらけ出した生殖器は、すでに固く勃起した状態にあった。

「あはぁ……す、すごい……お師匠さまのチ○ポ……す、凄い……」

興奮した様子で、ルティアが感嘆の言葉を口にする。それも無理はない。私が体外へと露出させた生殖器――それは巨人族の因子を元に作成したイチモツで、胴回りがルティアの太腿よりも大きく、長さはルティアの身長とほぼ同じくらいある。だが、ルティアが興奮している理由はそれだけではない。この剛直ベ○スの先端からは、雌を発情へと導くフェロモンが分泌されていた。これには排卵を誘発する作

用だけでなく、麻薬のような中毒性があり、ひと嗅ぎただけで、雌は興奮して理性を失ってしまうのだ。

「んはあ、あああ、んふうあああああ……」

それをいま、直に嗅いでいるルティアは、身体の奥底から湧き上がってくる欲情を必死に堪えようと、片方の手で乳房を揉みしだき、もう片方の手でアソコをいじりまわしながら、命令が下るのを必死になって待っている。その姿はまるでお預けをくらった雌犬そのものだ。

「ルティアよ」

「は、はいっ！」

「欲しいのか、コレが？」

そう言っ、私は剛直ペ〇スを上下に揺らす。ルティアの返答は素直であり、そして即答だった。

「はいッ！ ほ、欲しいです！ おおおお師匠さまの太くてッ、硬くてッ、遅い肉棒がッ、ルティアは欲しくてほしくてたまりませんッッッ！」

発情した雌犬の声で懇願するルティア。本当はすぐにでも飛びつきたいのであるが、それでも耐え、我慢しているのは、私の命令を絶対だと信望しているゆえである。

私は厭かな口調で告げた。

「ならば先にすべきことがあるだろう。しゃぶりなさい」

「は、はいいいッ！」

私が下した命令を受け、ルティアは文字通りの様子で、巨大肉棒に飛びついた。

「んはあああつ、んはっ、ぢゆるっ、じゅぷ、んぢゆるるううう……」

巨大なペ○スは、ルティアの小さな口では咥えることができない。それでも懸命に命令を実行しようと、突き出されたペ○スの先端に口づけをし、亀頭の割れ目に舌を差し入れて動かし、中に溜まっているフェロモン入りの汁を吸いだす。あるいは、ビクビクと脈打つ肉棒の表面を、その血管や筋に沿って舐め上げ、丹念に、丁寧に、まるで奉仕するように、巨大なペ○ス全体をその小さな舌でしゃぶってゆく。

「んはあああああ、ああ、んはっ、んぢゆるるるううう……」

卑猥な音が辺りに響き、発情フェロモン入りの淫香が辺りに漂う。ひと嗅ぎで雌を発情へと導くソレを、原液で摂取すれば、いかに肉体を強化されているとはいえず、ますます身体の方は高ぶって頭は性的におかしくなっていくばかりだ。その証拠に、ルティアが私の巨大なペ○スを舐め、しゃぶり、吸るつど、ルティアの足がガクガクと震え、腰が砕けそうになっている。股の間から溢れるいやらしい汁も、大洪水といった様子でビチャビチャと滴り溢れていても、それでもなお、ルティアは私のペ

○スから口を離そうとせず、一生懸命な様子で口淫を続けていた。

「んはあ、はあっ、ぢゆるっ、んぢゆるるるるううううう……」

舌を動かし、口を動かし、頭を動かして、私のペ○スをしゃぶり続ける。私に忠実で従順な愛弟子は、中断の命令が下るまでずっとこの奉仕を継続するだろう。その過程で性的にどんどんと狂っていくことになるが、孕み袋にはその姿こそがふさわしい。

（そろそろ良いか……）

充分、否、それ以上に、発情フェロモンがルティアの体内に行き渡ったことを確信してから、私はルティアに声をかけた。

「ルティア、そろそろいいだろう」

「ん、はあ……」

私の言葉を受け、ルティアが名残惜しそうにペ○スから口を離した。唇から引いた粘液質の糸が滴り、それが大きな乳房に垂れて光を放った。まだ物足りなさそうな表情を浮かべるルティアだが、それでも私の命令を絶対厳守する彼女は、身もたえしながら次の命令を待っている。無意識のうちにアソコに手を伸ばし、ぐちよぐちよになった股間を指でいじくりまわしながら。

「ルティアよ」

「はいッ！」

「尻をこちらに向け、突き上げて差し出しなさい」

「は、はいッ！」

顔に笑顔を浮かべて、ルティアはこの卑猥な命令を即座に実行に移した。

肉付きのよいお尻を私の方に向け、それと同時に頭を下げて前傾の姿勢を取る。すると、キュツと締まった肛門と、蜜が溢れる秘穴良く見えた。秘穴はまだ貝のよう

うに口を閉じたままだ。

「こ、これでよろしいでしょうか、お師匠さま」

赤らめた顔をこちらに向けながら問いかけるルティア。私は頷いた。

「よい。しかし、まだ不十分だな」

「え」

一瞬、ルティアの表情に戸惑いと困惑が翼を広げた。

私はニヤリと笑って、すかさず助け舟を出してやった。

「私のコレが欲しければ、自分でアソコを広げてみなさい」

そう言いながら、ペニスの先端で尻を小突く。私の言わんとしている意図を察したルティアの表情にパアッと笑みの花が咲いた。

「は、はいっ！ わかりましたっ！」

ルティアはすぐさま私の命令を実行に移した。細くしなやかな両方の手を股間へと伸ばし、秘穴をくぱぁと開け広げた。溜まっていた蜜がドロツと滴り、地面に垂れた。膜が張った薄桃色の肉がよく見える。

「これでよろしいでしょうか、お師匠さま」

再び顔をこちらに向けながら尋ねるルティア。

私はすかさず首を横に振った。

「ダメだ」

「――え」

ルティアの表情に、再び困惑が翼を広げた。その困っている様相を見ると、いますぐにでも猛るペ〇スを挿入したくなるが、私はその気持ちをグツと堪えて言葉を続けた。

「そればかりで私のコレが入ると思うのか？ もっと広げなさい」

そう告げてから、ペ〇スの先端で、開け広がった秘穴を小突いた。じゅくつという湿り気を帯びた卑猥な音がして、それと同時に、ルティアの背筋がゾクゾクと震えるのがわかった。

「は、はいッ、そうでした！ 申し訳ありません、お師匠さま！ すぐにッ、いますぐにッ、もっともっと広げますうッ！」

そう言ってルティアは、両手の指に力を込めた。

「んぎいいいいいいいいいいいいいいッ！」

グパアッと、秘穴が先ほどよりも大きく開け拡がり、拳が入るくらいの大きさになった。薄桃色の秘肉に張った膜が、所々破けているのが印象深い。

「い、いかがでしょうか、お師匠さま……？」

身体をガクガクと震わしながら、笑顔で問いかけてくるルティア。しかし、私は首を横に振ってみせた。

「まだまだだ。もっと大きく拡げるんだ」

「は、はいいいいいいいいいッッッ！」

命令を受諾したルティアが、腕に力を込め、自らの手で、自らの膣穴を、まるで破壊するような勢いで、思いっきり開け広げた。

メリッ、メリメリメリメリリリリリリイイイッ！

「んぎぐごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッッッ！」

ブチイッ、ブヂブチブヂイイイイイイイッ！

自傷行為とも取れる大拡張によって、処女膜のみならず、膣肉の筋も引きちぎれる音がして、ルティアの口からケダモノのような咆哮がほとばしった。この大拡張

によって、先ほどまで貝のようにぴったりと閉じていたルティアの秘穴は、無残にも大きく開け拡がってしまい、奥にある子宮口まで覗き見ることができるようになってしまった。人の頭を突っ込めば、そのまますっぽりと入ってしまいそうな拡張ぶりだ。

「い、いかがでしょうか、お師匠さま……」

この強引な拡張は、さすがのルティアでも大変なのか、身体はガクガクと震えており、声がほんのわずかに上ずっていた。顔や身体からは汗が噴き出ており、それが滴り、ポタポタと垂れていた。まるで雨に打たれたようにびっしょりと濡れている様子が実に興奮を誘う。しかし、私はまだ許しは与えなかった。

「まだまだだな。もっと大きく拡げることができるだろう」

「は、はい……っ！ も、もっと大きく……もっともっと開け広げて見せます
ううううツツツ！」

さらに腕に力を込め、歯を食いしばりながら、ルティアがさらなる膣穴拡張に取り掛かった。

「んぎいいいいいいいいいいッツツ！」

メリメリメリリリリイイイイイイイイイイッ！

膣肉が裂けるように開け拡がり、血が混じった淫ら汁がポタポタと地面に滴る。

目は半ば裏返り、白目を剥いており、その大きな瞳からは涙がこぼれ落ちていた。

「ふふふふ……」

私は、私の非道な命令を健気にも、懸命に実行する愛弟子の姿を眺めやりながら、さらなる非常な命令を下すことを思いつき、それを実行に移した。

「膣穴だけ拡げても、私のコレは挿入らないだろう。子宮口も同じように拡げるんだ。自分の手で、壊すように」

「は、はいいいいいいイイイイッ！」

この時、ルティアの顔に広がった表情は、開花したひまわりのような満面の笑みであった。私の命令を至福と感じる彼女は、それを受け入れて実行することに至上の喜びを感じる生き物なのだ。ゆえに、どんなに非常で非道な命令にも、彼女は喜々としてそれに従う。大きく開け広がった膣穴に手を突っ込むと、子宮口を無理やりこじ開けたのだ。

ぐバああああああああッ！

「ぐぼぎゃああああああああああああああああああああッッ！」

咆哮がほとばしり、口から涎の飛沫が飛散して、目がぐるんと上を剥いて白くなった。加減を知らない拡張は、自分を苦しめるだけと知りながら、ルティアは私の

命令を懸命に果たそうと、自らが苦しむことをいとわず子宮口をこじ開ける。その姿を見て、私は思わずゾクゾクした。この究極の自傷行為ともいえるおこないこそ、私の洗脳がルティアの芯まで支配している証拠であり、以後も彼女が私に従順に従うことを感じさせる振る舞いといえる。

「い、いかが、でしょうか……お、師匠さま……」

ルティアが震えた声で問うてきた。全身が脂汗でびっしりと濡れており、身体中が地震の直撃でも受けたかのようにガクガクと震えている。そして、卵管の穴すら丸見えの状態になっている子宮口からは、呼吸をするごとに、ポタポタといやらしい汁が滴り落ちていた。

「上出来だ」

私はニヤリと笑って不敵に告げるなり、すでに万端の状態で準備が完了していた巨大な剛直ペ〇スを、開け拡がったルティアの子宮めがけて思いっきり突っ込んだ。

………続きは本編でお楽しみください。